

日本体育・スポーツ・健康学会 国外学会参加補助金事業 2023 年度採択者学会参加レター

発行：2024 年 3 月 発行者：若手研究者委員会（担当：交流促進グループ）

国外学会参加補助金事業とは

本事業は、2023 年度より新たに設立されました。

本事業は、日本体育・スポーツ・健康学会に所属する若手研究者・大学院生が国外学会に参加し自身の研究報告を行うとともに、世界の最新の研究を肌で感じ、国外の研究者と交流する機会を得られるよう支援するものです。また、これにより得られた知見や経験を本学会員に還元することで、本学会ならびに我が国の体育・スポーツ・健康研究の発展に貢献することを目的としています。

2023 年度に採択された先生の学会参加報告をお届けします！

- ◇ 山崎 稜一郎 先生 慶應義塾大学（運動生理学）
- ◇ 夏原 隆之 先生 東京成徳大学（体育心理学）
- ◇ 土橋 康平 先生 北海道教育大学旭川校（運動生理学）
- ◇ 古橋 侑季 先生 筑波大学大学院（体育方法）
- ◇ 佐野 孝 先生 中京大学（発育発達）
- ◇ 春日 芳美 先生 大東文化大学（体育史）
- ◇ 岩崎 領 先生 福岡大学（バイオメカニクス）
- ◇ 紺田 俊 先生 鈴鹿大学（体育経営管理）

- 学会開催日順に掲載 -

応募資格者

本事業の採択者は、以下の条件を満たす会員からの申請書を審査し決定されます。

- ・日本体育・スポーツ・健康学会若手の会会員
- ・40 歳未満（当該年度 4 月 1 日時点）の研究者・大学院生
- ・当該年度に日本国外で開催される学会で、筆頭演者として発表する者

2023 年度は、以下の 8 領域が優先輪番の専門領域でした。

人文社会科学系：体育哲学、体育史、体育社会学、体育経営管理

自然科学系：体育心理学、運動生理学、バイオメカニクス、発育発達

次年度も皆さんからの応募をお待ちしております。

2023年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	山崎 稜一郎	所属先名称	慶應義塾大学
専門領域	運動生理学		
共同発表者（所属）	牛山 潤一（慶應義塾大学）		
学会大会名称	The 32nd annual meeting of the Society for the Neural Control of Movement		
（和名）	運動神経制御学会第32回年次大会		
発表タイトル	H+C9:K13lead movements improve the stability of sensorimotor synchronization of finger flexion to auditory rhythms		
（和名）	頭部運動が聴覚リズムに対する示指屈曲による感覚運動同期の安定性を向上させる		
派遣期間	2023年4月17日～4月23日	開催地	Victoria, BC V8W 3M7, Canada

1. 発表内容の概要

発表形式

ポスター

音楽リズムに合わせて頭を動かす行為は、楽器演奏やダンスなどの場面で普遍的におこなわれている。このような頭部運動が、音楽リズムに運動を同期させる行為（感覚運動同期）に作用するかは未解明である。本研究は、ふたつの実験からこの点を検討した。

実験参加者は音楽リズムの4拍子に合わせて利き手示指を屈曲させる課題に取り組んだ。利き手示指での同期運動と並行して同じ4拍子に対して上下の首振りをおこなう首振り条件を設け、首振りの無い対照条件と比較した。首振り条件での示指の同期運動は、屈曲タイミングのばらつきが有意に小さかった。次の実験では、4拍子に対して両手で示指屈曲をおこなう両手条件を設けた。利き手における同期運動は両手条件よりも首振り条件にて、4拍子と示指屈曲との時間差が有意に小さかった。さらに、首振り条件において、4拍子に対する首振りが安定している参加者ほど、そのときの利き手示指での同期運動が安定する有意な相関関係がみられた。一方で、両手条件では、同期運動の安定性について非利き手と利き手の間に有意な相関はみられなかった。

本研究は、感覚運動同期が運動効果器に依存して変調されることと、楽器演奏やダンスにおいて頭部運動が特異的な役割を持つ可能性を示唆している。

2. 国外学会参加の成果および感想

ポスターセッションでは、多くの研究者から本研究の今後の発展について数々の有益な意見を聞くことができた。特に、パネルセッションに登壇していた研究者と深い議論を交わすことができ、研究者としてのアピールを果たすことができた。また、その議論の中で本研究に対して肯定的な評価を得られたことで、当該研究分野に対して本研究が貢献できることが実感された。

大会内の各講演には、その分野の大家と呼ぶべき研究者らが多く登壇しており、彼らの最新の研究やアイデアについての本人による発表を聞き、研究活動を進めていくうえでの視座を高められた。特に、そうした一流の研究者たちが、どのポスター発表についても分け隔てなく熱心に議論をしている様子は、将来目指すべき研究者像のひとつとして強く印象に残った。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

今回の国際学会で発表した研究結果をもとに、その背景にある生理学・神経科学的なメカニズムを明らかにする研究を現在遂行している。これらの一連の研究により、外部環境からの情報に対する運動の協調についてのさらなる解明が期待される。そして、獲得された知見をもとに、運動障害のリハビリテーションを進展させるための応用研究を進めることを目指している。将来的に、パーキンソン病をはじめとする神経変性疾患にともなう運動障害を改善するための、新たなリハビリテーション手法を開発することが最終目標である。

4. 学会の様子（写真）



会場ロビーの様子



ポスターセッション会場での報告者本人

2023年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	夏原 隆之	所属先名称	東京成徳大学
専門領域	体育心理学		
共同発表者（所属）	秋山 隆之（新潟医療福祉大学），中山 雅雄（筑波大学）		
学会大会名称	The World Congress on Science and Football 2023		
（和名）	科学とフットボールに関する国際会議2023		
発表タイトル	Qualitative case study of leadership behavior of professional football coach Ivica Osim		
（和名）	プロフェッショナルフットボールコーチ イビチャオシムのリーダーシップ行動における定性的事例研究		
派遣期間	令和5年5月24日～5月26日	開催地	オランダ・フローニンゲン

1. 発表内容の概要	発表形式	ポスター発表
<p>本研究は、感情を鼓舞し価値観を促進することで行動変容を導こうとする変革型リーダーシップ（TFL）に焦点を当てた。先行研究がジュニアアスリートやコーチの視点に集中しているのに対し、本研究では、エリートレベルのプロフットボールコーチであったイビチャ・オシムのコーチング行動について、元プロサッカー選手の視点から、コーチのTFLに対する選手の認識を探ることを目的とした。結果では、知的好奇心の刺激、高いパフォーマンスへの期待、刺激的な動機づけ、集団目標の受容の促進に関することが多く語られた。これら4つの要素はインタビューデータの約80%を占め、TFLの重要な側面であることが示唆された。コーチのTFLにおける特徴として、例えば、刺激的な動機づけにおいては、勝利や順位といった明確な目標よりも、危険なチームという暗黙的なビジョンを示し、チームのパフォーマンスを優先し、リスクテイクと選手の献身性を重視していることが明らかにされた。この研究結果は、理論的な理解とプロフットボールのコーチングへの実践的な示唆の両方に貢献し、選手の成長とチームの成功のための指導戦略を洗練させるための貴重な洞察を提供するものであると考えられる。</p>		

2. 国外学会参加の成果および感想

国外学会参加の感想としては、フットボールの学会においてサッカー界で世界的にも有名なイビチャ・オシム氏のコーチングを研究の対象とした研究を発表したからだと思いますが、多くの研究者が足を止めてポスターに興味を示して頂きました。また、成果としては、数名の研究者と意見交換することができました。例えば、インタビューと組み合わせ質問紙などを活用しTFLに関する定量的なデータを示すことや、サンプル数を増やし質的データの信頼性を高めること、選手の視点だけでなくコーチの視点も含め多角的に検討してみるなど、様々なアドバイスを受けることができ、この研究をさらに発展させるための数多くのヒントを得ることができた貴重な機会となりました。

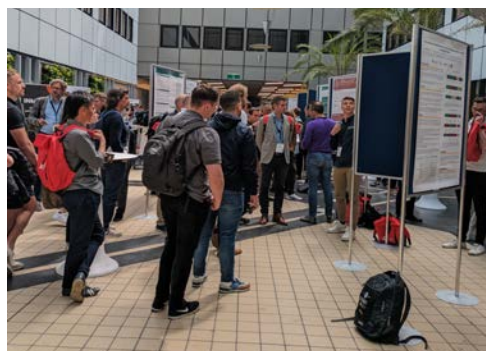
3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

本研究が拓く未来として、例えば、優秀な指導者がどのようにTFLを発揮してコーチングしているのかについて様々な視点を提供することで、実践家（コーチやキャプテンなどのリーダー）の実践力を高めることに貢献できるのではないかと考えています。今後の抱負としては、コーチ育成のための教育プログラムの開発などに役立てられるように、TFL研究をさらに推し進めTFLに関する理解をさらに深めたいと思っています。

4. 学会の様子（写真）



学会シンポジウムの様子



ポスターセッションの様子

2023年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	土橋 康平	所属先名称	北海道教育大学旭川校
専門領域	運動生理学		
共同発表者（所属）	片桐 陽(筑波大学)、藤井 直人(筑波大学)、西保 岳 (筑波大学)		
学会大会名称	2023 American College of Sports Medicine Annual Meeting		
(和名)	2023アメリカスポーツ医学会 年次大会		
発表タイトル	Hypocapnia Contributes to the Development of Post-exercise Hypotension After High-intensity Intermittent Exercise		
(和名)	低二酸化炭素血症は高強度間欠的運動後の低血圧に寄与する		
派遣期間	2023年5月30日～6月2日	開催地	コロラド、デンバー（アメリカ）

1. 発表内容の概要	発表形式	口頭
<p>ランニング等の動的運動後には、動脈血圧が運動前よりも低下する運動後低血圧が生じる場合がある。この運動後低血圧は頭痛や失神の一要因とされていることから、安全に運動やトレーニングを行うためにも運動後低血圧の発生メカニズムを解明することは非常に重要である。しかしながら、高強度運動後に生じる運動後低血圧の発生メカニズムは不明である。高強度運動後には代謝量以上に換気が亢進する過換気が生じ、それにより動脈血中の二酸化炭素(CO₂)分圧が減少する(低二酸化炭素血症)。我々は以前、運動時の低二酸化炭素血症により動脈血圧が低下したことを示唆した。その為、高強度運動後に生じる低血圧にも過換気による低二酸化炭素血症が関与しているという仮説を立て、低二酸化炭素血症が高強度間欠的運動後の循環応答に及ぼす影響を検討した。その結果、高強度間欠的運動後に過換気により低二酸化炭素血症が生じ、運動後低血圧も観察された一方、運動後に高二酸化炭素を吸入し、低二酸化炭素血症を起こさない条件では運動後低血圧の反応が消失した。本研究結果から、高強度運動後の低二酸化炭素血症は運動後低血圧に寄与することが示唆された。</p>		

2. 国外学会参加の成果および感想

今回は自身として初めてACSMのAnnual Meetingに参加した。これまで、国際学会の参加経験はあるものの、自身の研究分野(呼吸・循環調節)の発表数は多くなかったため、その点においてもこれまでより多くの関連発表があり、学びが多いものとなった。発表外でも親交のある海外研究者と発表内容についてディスカッションを行い、論文執筆へ向けてのアドバイスをもらうことが出来た。実際の発表時には、動脈血圧とは別に低二酸化炭素血症と脳循環に関する質問があり、返答に若干躓いてしまう場面があったものの、フロアで再度ディスカッションを行うことが出来、脳循環も含めた検討をしてみてはというアドバイスをいただいた。

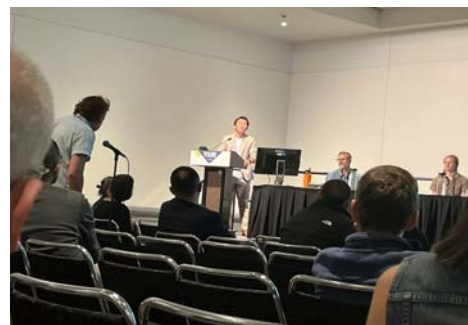
3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

より円滑なディスカッションを行うために、英語力をさらに向上させる必要があると感じた。他の発表を聞いていても、一部理解できない部分が散見されたため、国際的に活動していくためにも更なる成長が必要であると感じた。また、本研究内容は安全にスポーツを行っていく上での知見となることに加え、扱い次第では非薬理的な高血圧治療法として活かせる可能性がある(運動前よりも血圧が低下するため)。その為、今後は発生メカニズムや運動後低血圧を用いた高血圧治療法への可能性を検討していきたい。

4. 学会の様子（写真）



発表中の様子



質疑応答の様子

2023年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	古橋 侑季	所属先名称	筑波大学大学院
専門領域	体育方法学		
共同発表者（所属）	村富 浩太郎（筑波大学大学院）・吉田 拓矢（ハイパフォーマンススポーツセンター）・谷川 聡（筑波大学体育系）・前村 公彦（筑波大学体育系）		
学会大会名称	the 28th Annual Congress of the European College of Sport Science		
（和名）	第28回ヨーロッパスポーツ科学学会大会		
発表タイトル	Effect of Attentional Focus Strategy on Drop Jump Performance, Kinetics and Kinematics : Comparison by DJ Experience Level		
（和名）	注意方略がドロップジャンプのパフォーマンス、キネティクス、キネマティクスに及ぼす影響：ドロップジャンプの経験レベルによる比較		
派遣期間	2023年6月27日～7月9日	開催地	パリ（フランス）

1. 発表内容の概要

発表形式

ポスター

背景：注意方略(AFS)は、運動中の人の注意の方向を変化させる指導方法である。これまでに、AFSがドロップジャンプ(DJ)のパフォーマンスを向上させることが明らかにされている。しかし、AFSがDJの力発揮と動作に及ぼす影響は明らかにされていない。そこで、本研究ではAFSがDJパフォーマンス、力発揮および動作に及ぼす影響を検討した。**方法：**男子大学生38名をDJ熟練者群とDJ非熟練者群に分けた。対象者は、内的注意、外的注意および中立的注意のそれぞれを誘発する口頭指示を聞いた後に、台高0.3mの台を用いたDJを2回ずつ行った。**結果：**熟練者群において、DJ-indexは中立的注意が内的注意よりも高い値を示した。コンセントリック局面における股関節トルクと正のパワーは、中立的注意が内的注意より小さく、重心最下時における股関節角度は、中立的注意が内的注意より大きな値を示した。非熟練者群において、DJ-indexは外的注意が内的注意よりも高い値を示した。コンセントリック局面における足関節の正のパワーは外的注意が内的注意よりも大きく、重心最下時における股関節角度は、外的注意の方が内的注意よりも大きい値を示した。**結論：**AFSはDJのパフォーマンス、力発揮および動作に影響を及ぼすことが明らかとなり、AFSを選手のDJの経験レベルに応じて使い分ける重要性が示された。

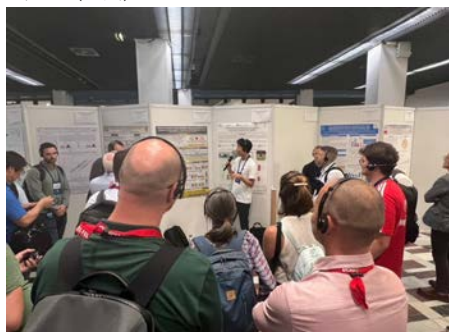
2. 国外学会参加の成果および感想

今回のECSSは私にとって初めての国外学会であり、英語での研究発表はとても緊張したが、素晴らしい経験をする事ができました。自身の研究を英語で伝えることは、非常に難しく、英語力を向上させたいと強く思う良い機会になりました。質疑応答では、他国の研究者から質問をたくさんいただき、私の研究に興味を持ってもらえたことが非常に嬉しかったです。また、国外の研究は国内の研究よりもアイデア性が高い研究が多いことが興味深かったです。さらに、若手研究奨励賞にノミネートしていただいたとき、国内外を問わず研究を評価してもらえることは、自身の研究へのモチベーションに繋がると感じたため、これからも研究成果を発表していこうと思いました。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

今回の学会では、若手研究奨励賞のノミネートに終わったので、今後は国外の学会でより良い評価をしていただけるように、日々の研究活動に励みたいと思います。その一方で、国内でも自身の研究をトレーニング現場で認知してもらえるように、定期的に学会参加や論文投稿といった研究発表を行っていきたいです。そのような研究活動の積み重ねにより、私の研究が多くのアスリートの競技力の向上や、新たな指導方法の確立に貢献できるようにこれからも精進します。

4. 学会の様子（写真）



発表中の様子



一緒に学会に参加した先輩との写真

2023年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	佐野 孝	所属先名称	中京大学スポーツ科学部
専門領域	発育発達		
共同発表者（所属）	保田 和奏（神戸大学），長野 崇（大阪国際大学），上田 恵子（畿央大学），國土 将平（中京大学）		
学会大会名称	28th Annual Congress of the European College of Sport Science		
（和名）	第28回欧州スポーツ科学会議		
発表タイトル	Differences in proficiency level of the straddle vault movement in Japanese elementary school children		
（和名）	日本人の小学生における開脚跳び動作の熟達度差の実態		
派遣期間	2023年7月4日～7月9日	開催地	パリ（フランス）

1. 発表内容の概要	発表形式	ポスター
<p>本発表では、小学校体育授業で扱われる開脚跳び動作について、児童の動作の熟達度差を学年間と学級間で比較し、実態把握を行った結果を報告しました。小学校4校の3-6年生486名を対象に、開脚跳び動作を6観点から評価し、その熟達度を判定しました。そして、熟達度の出現率が学年間や学級間で異なるかについて、χ^2検定による出現率の比較を行いました。対象者の熟達度は、失敗型64名、腕動作依存型100名、着地不安定型168名、安定試行型121名、繰り返し出現型33名で、熟達度の出現率は学年間で有意に異なり、3年生で失敗型、4・5年生で腕動作依存型、6年生で着地不安定型が多くなっていました。一方、熟達度の出現率は学級間でも異なり、3・4・5年生（各5学級）で有意な偏りが認められました。これらより、小学生の開脚跳びの熟達度の状況は、学年だけでなく学級レベルでも明確に異なることがわかりました。器械運動では学習者の熟達度や指導の質が指導者の知識に左右されやすい点、小学校では体育専科ではない教諭が授業を行う場合も多い点を踏まえ、専門的かつ実用的な評価・指導法の共有が、授業・指導の充実につながることを提言しました。</p>		

2. 国外学会参加の成果および感想

院生時代は、コロナ禍で海外渡航が難しい状況で、今回が国外学会初参加となりました。ヨーロッパへの遠征自体が初めてで、研究発表以外にも諸々の不安を抱えながら、チャレンジのつもりで参加しました。学会の雰囲気に関して、特にポスターセッションでは、同じ学問領域で研究する「仲間」として、国籍を問わず積極的な交流が図られていたのが印象的でした。発表への反応に関して、跳び箱運動は世界的にみてポピュラーな種目とは言えませんが、子どもの動きをいかに捉えるか、有効な評価・指導法を現場にいかにか共有するかについて、参加者の関心と共感を得られたと感じています。日本では、走跳投をはじめ多様な動作の質を捉える試みが進められ、そうした知見の有効性について議論することができました。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

学会では、世界各国の体育・スポーツの位置付けや研究的関心の実態に触れ、刺激を受けたとともに、日本の体育・スポーツ研究の緻密さ、正確さ、着眼点の面白さを再認識する機会となりました。私の研究の軸は、日本の子どもたちの充実した学び・成長に資する知見を生み出すことなので、今後も日本のカリキュラムや子どもの実態を出発点に研究を進めることになると考えています。その中で、今回のように海外の研究に触れて視野を広げると同時に、日本で自分がこだわりをもって進める研究が、直接的でなくても（ある枠組みだけでも）世界の研究者の関心とつながり、更なる発展の可能性を探ることは重要と考えます。今回が記念参加とならないよう、研究・発信を継続していきたいと思えます。

4. 学会の様子（写真）



学会会場の様子



報告者の発表の様子

2023年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	春日 芳美	所属先名称	大東文化大学
専門領域	体育史		
共同発表者（所属）	なし		
学会大会名称	International Society for the History of Physical Education and Sport - ISHPES 2023		
(和名)	国際体育・スポーツ史学会 2023		
発表タイトル	"Hygienic beauty" in Japan during the 1880s : Focusing on its correlation with the popularization of women's physical education		
(和名)	1880年代日本における「衛生美人」－女子体育の普及との関連に着目して		
派遣期間	2023年7月8日～7月16日	開催地	スイス（ローザンヌ）

1. 発表内容の概要

発表形式

口頭

この研究は、日本の女性の健康状態を改善するために打ち出された「衛生美人」という概念によって、身体的な美が日本の一般市民によってどのように受け入れられたかを調査する文献レビューである。明治時代初期、知識人たちは日本人の外見や体格が西洋人に比べて劣っていると見なし改善策を検討した。同時に、ペストや結核などの伝染病が日本人の生命を脅かしており、「国を強くする」という観点から衛生に重点が置かれるようになった。健康美をよいものとする「衛生美人」の概念は、これらの懸念に対応して生まれたものである。これは、女性の美しさは顔の美しさを除外して、身体の健康だけを基準に評価すべきだという考えに基づいている。国家（またはそれに類似した組織）が特定の目的のために社会的価値観を変えようとした事例として、「衛生美人」は大変興味深いものである。「衛生的美」の概念が元の目的を達成できなかった後も、第二次世界大戦前の日本の指導者は女性の健康（および国全体の健康）を促進するために健康な体を美の新しい概念に組み込もうと試みた。しかし、一方で、「衛生的美」になる手段として与えられた体操やスポーツは、女性がその活動自体を楽しむ目的としての価値を持っており、時間とともに次第に一般の市民の間で人気を博すこととなった。

2. 国外学会参加の成果および感想

ISHPESはヨーロッパや東アジアをはじめ多くの地域から研究者が参加する国際学会であり、私は大学院在学中から所属して発表を行ってきた。今回は対面で参加した日本からの発表者が私一人だったが、日本の事例に興味をもった多くの参加者から質問を受け、その質問内容からこれまで気づかなかった多くの点に対して気づきを得た。自身の語学力の問題から十分な説明ができずもどかしく感じる場面もあったものの、異文化を通して日本の体育史について多くの知見を得ることができたといえる。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

今後も引き続き積極的に国外での研究成果の発表を行っていきたいと考えている。そのために、研究内容を深めるとともに語学力を高めていきたい。また、近い将来、近代女子体育・スポーツ史研究を様々な文化圏の研究者と共同研究としてまとめていくことも考えたい。

4. 学会の様子（写真）



座長のSanjurjo氏と申請者



オリンピックミュージアムのクーベルタン像と聖火

2023年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	岩崎 領	所属先名称	福岡大学
専門領域	バイオメカニクス		
共同発表者（所属）	布目 寛幸（福岡大学）		
学会大会名称	41st International Society of Biomechanics in Sports Conference		
（和名）	第41回国際スポーツバイオメカニクス学会大会		
発表タイトル	The predictive model of interval time based on pacing strategy in a 400 m hurdles race		
（和名）	400mハードル走におけるペース戦略に基づくインターバルタイムの予測モデル		
派遣期間	2023年7月10日～7月18日	開催地	Milwaukee, USA

1. 発表内容の概要	発表形式	口頭
------------	------	----

本研究の目的は、400mハードル走におけるインターバルタイムを正確に特定するための統計モデルを作成し、その信頼性について検証することで、より良い統計モデルを提供することを目的とした。データサンプルを155個収集し、先行研究の階層化モデリングされたペース戦略を参考に、①非階層モデル、②レースを前半と後半の2セクションに分割した階層モデル、③レースを前半、中盤、後半の3セクションに分割した階層モデルをそれぞれ作成し、レースタイムを説明変数、インターバルタイムを目的変数とした回帰モデルを作成した。なお②と③では、まずレースタイムを説明変数、分割されたセクションタイムを目的変数としたモデルを作成し、その後セクションタイムを説明変数、インターバルタイムを目的変数とした階層化モデリングを行った。予測精度の検証については、Leave-one-out Cross-validationを実施し、評価した。その結果、③の階層モデルにおけるインターバルタイムの予測精度が最も高い値を示した。したがって、③の統計モデルを使用することで、競技者やコーチは目標とするレースタイムに必要なセクションごとのペース配分を特定し、そのペース配分を構成するインターバルタイムを把握することが可能となり、レースプランニングやトレーニングでの修正を行うことができるだろう。

2. 国外学会参加の成果および感想

当該学会の発表の多くは、動作分析手法を用いた研究成果である。本研究は、学会の性格上やや特殊な内容であったが、陸上競技を対象とする研究者を中心に質問を受けた。中でも、本学会が出版するSports Biomechanicsの投稿時の統計に関するrecommendationを執筆したProf. Andrew Harrisonから、直接データの取り扱い方法や現場で実用する際のギャップについて助言を受けることができた。Prof. Andrew Harrisonは、実際の競技現場での指導やサポートの経験も有しているとのことで、本研究の最終目標である競技現場での活用に向けて充実した意見交換ができた。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

申請者は、陸上競技のバイオメカニクスを専門としているが、研究と競技現場でのギャップを埋めたいと考えている。本研究の成果は、競技現場でも比較的活用が容易であるが、十分な情報量を提供するに至っていないため、他のパフォーマンスに関連する要素も含めた包括的な指標を使用することで、競技パフォーマンスの向上に直結する統計モデルを作成したいと考えている。本学会のシンポジウムでも、機械学習や新たな統計手法を用いたバイオメカニクス研究のあり方が講演された。学会で得られた意見や知識をもとに、より確からしく、現場に応用可能な研究成果を出していきたい。

4. 学会の様子（写真）



発表の様子



最終日バンケットの様子

2023年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	紺田 俊	所属先名称	鈴鹿大学
専門領域	体育経営管理		
共同発表者（所属）	前田 和範（高知工科大学）, 富山 浩三（大阪体育大学）		
学会大会名称	Sport Management Association of Australia and New Zealand conference 2023		
（和名）	オーストラリア・ニュージーランドスポーツマネジメント学会2023		
発表タイトル	Effect of event attachment on place attachment and behavioral intention of Suzuka City Marathon participants -Comparison between motorsports fans and non-fans-		
（和名）	鈴鹿サーキットマラソン参加者のイベント愛着が場所愛着および行動意図に及ぼす影響 -モータースポーツファンと非ファンの比較-		
派遣期間	2023年11月27日～12月4日	開催地	キャンベラ（オーストラリア）

1. 発表内容の概要

発表形式

口頭

Covid-19感染拡大前の2019年と比べてマラソンイベント参加者は減少しており、参加者の確保には他のマラソンイベントと差別化したイベントの独自性が求められる。本研究の目的は、鈴鹿サーキットで開催された鈴鹿シティマラソンを対象にマラソンイベント参加者のイベント愛着が場所愛着および行動意図に与える影響をモータースポーツファン（MF）と非モータースポーツファン（NF）の比較を通じて明らかにすることであった。2022年12月18日に参加者を対象に質問紙調査をゴール後に実施し、10kmの部に参加した325名を分析対象とした。独立変数をイベント愛着3因子（機能的・感情的・象徴的意味）、従属変数を行動意図、媒介変数に場所愛着を設定し、MFとNFの比較はSEMによる多母集団同時分析を行った。要因間の結果は、両グループが感情的意味は行動意図、感情的意味は場所愛着に正の影響を与えた。また、MFは場所愛着から行動意図に正の影響を与えた。間接効果は、MFの感情的意味が場所愛着を介して行動意図へ与える影響が統計的に有意であった。以上の結果から、他のスポーツファンに新しい場所の意味付けを持たせるような戦略がマラソン参加者の確保につながる可能性がある。

2. 国外学会参加の成果および感想

モータースポーツの聖地である鈴鹿サーキットをマラソンイベントとして活用する特異性に関心を持ってもらえた。研究発表に対する質問は、「他の国でもF1は開催されているが、他国を対象とした時にどのような結果が得られるのか」や「このようなマラソンイベントは日本で他に開催されているのか」などの質問があった。日本では、滑走路や競馬場を走るマラソンイベントも開催されており、「他国でも既存のファンが存在する場所でマラソンイベントを開催することは参加者確保につながる可能性がある」といった議論ができた。今回の研究発表を通じて、世界中の同じ志を持つ研究者と情報交換をする機会は今後の研究活動に対するモチベーションを高める機会となった。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

今後の抱負は発表した研究内容を論文として掲載できるように研究活動を進めたい。また、本研究は横断的な調査であったが、2023年度の鈴鹿シティマラソン参加者調査では本研究と同様の測定項目を用いて縦断的（事前事後）に調査を実施した。本研究から発展させた形で参加者調査を継続しており、今後もイベント主催者に有益なインプリケーションができるように精進していきたい。本研究が拓く未来は、各地でマラソンイベントの参加者確保が困難になってきている課題に対して既存の地域資源を見つめ直し、マラソンイベントとしての新しい場所の意味付けを付与することで継続的なイベント開催に貢献できる可能性がある。

4. 学会の様子（写真）



著者の共同研究者ら（キャンベラ大学にて）



オープニングセレモニーの様子